FAIRY TAIL　亡霊の銃撃士

コッコ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

運命に翻弄され、運命を憎む少女が力を求めて幽鬼の支配者の魔導師となった。

幽鬼の支配者に入ってから歳月が流れてエレメント４に匹敵する魔導師と認められマスタージョゼに一つの支部の支部長に任命され更にギルドの勢力を拡大させて行く。

だが数年後、少女が留守の間に魔導師ギルドフェアリーテイルと抗争になりギルドは壊滅的なり解散命令を下される事となった。

これは一人の力しか求めなかった亡霊がマスターマカロフに誘われフェアリーテイルへと移籍して答えを探す話。

目次

地獄からの生還 ―― 1
幽鬼の支配者 ―― 3
支部長任命と出会い ―― 5
村を食う ―― 8
迎え ―― 12
支部長としての仕事 ―― 14
幽鬼の支配者の解散 ―― 16
亡霊の道筋 ―― 18
妖精の尻尾へ ―― 20
収穫祭の前夜 ―― 23
収穫祭の始まり ―― 25
バトル・オブ・フェアリーテイル～1～ ―― 28
バトル・オブ・フェアリーテイル～2～ ―― 31
バトル・オブ・フェアリーテイル～3～ ―― 34
バトル・オブ・フェアリーテイル～4～ ―― 36
バトル・オブ・フェアリーテイルの終幕 ―― 39
収穫祭終夜 ―― 41
仕事 ―― 43
ナツとの勝負 ―― 46
特別編バレンタインデー ―― 48
連合軍、集結　～前編～ ―― 51
連合軍、集結　～中編～ ―― 53

地獄からの生還

数年前、黒魔術教団と言う組織により無理矢理連れて来られた奴隷達が朝から晩まで楽園の塔の建設をさせられていた。その中に一人の紅の短髪の少女リセラが重い材料を運ばされていた。

「こらぁ！早く運べ！」

「きゃぁ！」

リセラが少し遅れれば容赦無く鞭を打たれるがリセラは耐える。ここで痛みで体勢が崩れればまた鞭を入れられると考えたからだ。

「（くそ、殺してやる・・・いつか必ず殺してやる!!）」

リセラは憎しみを宿した目で作業を続ける。晩になりリセラは牢屋に放り込まれ閉じ込められる。リセラは徐に起き上がり鉄格子が掛かる窓の外を見る。外は雲一つ無い夜の夜景で星が輝いて見えた。

「私はいつかここを抜け出す・・・絶対に自由をこの手に取り誰にも妨げられない力を持ってやる」

翌日、何時もの様に作業に出ようとした時、何かが騒がしかった。

「反乱だーー!!」

反乱。その言葉を聞いてリセラは何処の馬鹿が反旗を翻したのか不明だがリセラは好機だと思った。反乱に便乗して脱走が出来ると考えたのだ。反乱が失敗しても自力で逃げ出せれば良し、成功したら大手を振って出れるからだ。

「早く行かないと・・・」

リセラは立ち上がって牢屋の外に出て走り出す。既に塔全体で戦闘が始まっており怒声が響いてくる。リセラは人気の無い場所へ出るとそこには一隻の船を見つける事が出来た。

「やった。これで・・・」

自由、と言おうとした瞬間、足元が爆発した。リセラは吹き飛された。

「まさか、魔導師！」

「手間を取らせやがって」

魔導師と思われる男が杖を振り上げる。リセラは死の恐怖に包ま

れていた。自由を手にする前に死を向かえると思うとリセラは悔しくて堪らず男から目を離すと側に武器らしい何かの道具が落ちていた。
「死ね！」
「うわぁぁぁぁぁ!!」
リセラは咄嗟に手に取って男に向けると光と共に何かが撃ち放たれた。リセラはそっと見ると男が倒れていた。リセラの手には魔銃が握られていた。
「あ、あぁ・・・私、人を・・・・・・」
リセラはその場にへたりこむと吐いた。その状態はしばらく続き落ち着いた時には怒声は収まりつつ合った。
「はぁはぁ、人を殺した・・・いや、あんな奴等は人なんかじゃない。そうよ殺したって悲しむ奴はいない！早く船に乗ならきゃ」
リセラはその手に男を殺した魔銃を持って船の状況を調べて出航した。楽園の塔はどんどん離れて行ってすぐに見えなくなった。
「やった・・・これで私は自由だ！自由だ!!・・・あっははははは！」
リセラは笑う。外に出ると言う悲願を遂に達成し自由を手に入れたのだ。だが、リセラは満足はしていなかった。
「次よ。次の目的は・・・大きな力を手に入れる。誰も逆らえない程の力をこの手に!!」
こうして一人の少女の脱走は成功したのだった。

幽鬼の支配者

数日後、リセラは無事に何処かの浜へ上陸する事が出来た。リセラは船を降りると歩いた。宛もなく帰る場所すら無くしたリセラはただ、歩き続けるばかり。

「はぁはぁ、くそ。今更になって疲れが・・・」

リセラは道中、目眩に襲われて倒れ込む。目の前がボヤけて見える様になったリセラの最後に見た物は道化の様な人影だった。

「・・・ん?ここは・・・・・・」

「気がつきましたか?」

リセラが目を覚ますとそこは薄暗い部屋のベットの上だった。その横にさっきの道化の男がいる。

「ここは?」

「ここは魔導師ギルド幽鬼の支配者ですよ。あなたは道端で倒れていて助けないわけにはいかないので保護しました」

「そうですか・・・」

リセラは自分の悪運に感謝した。あの場所で誰とも出会えなければ死んでいた。男は続ける。

「所で何故あんなボロボロの布みたいな服を着ていたのですか?何か訳があるならお話しなさい」

リセラは男に訳を話した。楽園の塔で奴隷として重労働をさせられて逃げ出した事を全て。男は話を静かに聞くとリセラを抱き締めた。

「辛かったでしょう・・・しかし、もう大丈夫です。私達幽鬼の支配者があなたを守りましょう。だからもう涙は流さなくても良いのですよ」

男の言葉を聞くとリセラは気が付かない内に涙を流していた。初めて自分の溜まっていた何かを吐き出せた。リセラは泣き出した。

「落ち着きましたか?」

「はい、すみません・・・」

リセラは恥ずかしそうにうつ向く。

「あの、私ここのギルドの一員になりたいです！例え最初は弱くても必ず力を身につけてこのギルドを強くしますから！どうかお願いします」
「・・・はい。わかりましたこれからはあなたも幽鬼の支配者ですよ。リセラさん」
　リセラはこうしてマスタージョゼ率いる幽鬼の支配者の一員として活動する事になった。拾われた恩を報いる事と力を求める両方の目的を持って。
　数年後、とある場所で大きな光と爆発が起きていた。その場所には多くの人が倒れておりその中心に一人の赤い服で紅の短髪をした少女が両手に魔銃を持って立っていた。
「ふぅ、盗賊の殲滅は完了・・・報酬を貰って帰ろう」
「・・・く、くそ。幽鬼の支配者の亡霊め。リセラ＝レクセリアめ・・・！」
　盗賊の男は恨みがましくリセラを見て気を失った。この数年で成長し幽鬼の支配者屈指の実力者へと成長したのだ。盗賊の討伐依頼を終えてギルドへの帰途に着いた。
「ただいま」
「おぉ、リセラお帰り」
「お帰りなさい姉御！」
　年輩の男の魔術師と後輩の女の魔導師に挨拶を返された。リセラは頷いてジョゼに依頼の結果を報告しに行く。

支部長任命と出会い

ジョゼの元に報告に来たリセラを待ち受けていたのはジョゼと鉄竜の異名を持つ幽鬼の支配者最強の魔導師ガジルだった。
「マスター。依頼が完了しましたのでご報告に戻りました」
「ご苦労。あなたは本当に優秀ですね」
リセラの報告にジョゼが褒めると普段は見せない笑顔を見せる。リセラは楽園の塔以来、感情を殆んど表に出さなくなり感情を見せるのはジョゼか本当に親しい者だ。
「いえ、私はまだまだです。ガジルに本気を出しても勝つ事は出来ていませんから・・・」
「ふふふ、勝った事は無くても互角には戦っているではありませんか。それで十分ですよ。それよりあなたに任せたい事があるのですよ」
「何ですか?」
ジョゼが任せたいと言う内容に興味を持って耳を傾けていた。
「あなたに一つの支部を任せたいのです。支部を率いて更にこのギルドを成長させてもらいたいのです。引き受けてくれますね?」
「仰せのままに・・・マスタージョゼ」
ジョゼにリセラは優雅に御辞儀し支部長を引き受けた。リセラは外に出ると一人見知った女性が通っている。
「ジュビア」
「リセラさん」
エレメント4の一人ジュビア。S級魔導師に匹敵する実力者でありリセラはちょっとした友人関係にあった。
「どうしたのですか?」
「私は明日から支部長として支部を率いる事になったの。しばらくはお別れになるから挨拶をしておこうと思ってね」
「そうなんですか?それは本当にすごいです」
ジュビアとリセラ。お互いに表情は無く他人が見れば少し恐い雰囲気であるが二人は特にいがみ合ってはいない。リセラにとってジュビアは同年齢の後輩に当たる。そんなジュビアをリセラは接し

ている内に奇妙な友人関係へと構築したのだ。
「まぁ、仕事の時に寄って良いわよ。歓迎するわ」
「はい。楽しみにしてます」
　二人は相変わらず無表情だが何処か楽しそうにしている。翌日、リセラは自分の城となる支部に出発したが。
「ここは・・・何処？」
　地図を持っていながら蜘蛛の巣谷に迷い混んで迷子になっていた。リセラは自覚の無い方向音痴であり地図を回して見てる時点で詰んでいた。
「はぁ、どうしよう・・・」
　リセラはさ迷って歩き回ると谷の何処かで何かの音が鳴り響いていた。この音はお腹の音その物だった。
「誰よこんな所で壮大にお腹の音を鳴らすのわ・・・」
　リセラが腹の虫を鳴らす者に文句を言った瞬間、自身も大きな腹の虫が鳴った。
「・・・取り合えずお腹すいたしこの辺でご飯にしよ」
　リセラは徐に鞄から調理器具と食材を取り出した。リセラが何故、調理器具と食材を持っているかと言うと自覚の無しの方向音痴で一週間道に迷って空腹に襲われ続けたからだ。その時の教訓で色々と持っている。
「出来た。いただき」
「おーーい!!」
　リセラが座ってスープとパンを食べようとした時、誰が勢いよく走ってくる。桜色の髪で鱗みたいなマフラーを首に巻いてほとんど半裸の少年だ。
「食べ物をくれぇぇぇぇ!!」
「ちょッ!?まっ」
　静止する前に少年は足を石に引っ掻けて転けてリセラにぶつかる。
「いてて、悪い悪い。ぶつかっちまった」
「痛い・・・あ！食べ物が・・・・・」

少年とぶつかった拍子に食べ物全て地面に落ちてしまい食べられる物ではなくなった。
「ナツ！」
「何走ってやがる！」
この少年ナツの仲間と思われる集団がこっちへ来る。リセラは溜め息をつきながら少年の方を見ると右肩に妖精の尻尾の赤いが刻まれていた。ギルドを象徴する紋章は服や身体のに刻まれており、その紋章が何処の所属かをすぐに分かるようになっている。リセラの場合は少年と同じく右肩だが服で見えない。
「あなた達、妖精の尻尾？」
「あぁ、そうだが？」
赤い長髪で鎧姿の魔導師と思われる女性の言葉を聞いてリセラは確信へと向いた。ここでいきなり敬遠の仲の妖精の尻尾と鉢合わせしたのだ。リセラは取り合えず霊鬼の支配者と悟られないように退散する為、道を聞いて進もうと考えた。
「そうなんですか。私は旅をしているのですが道に迷ってしまって。この谷の道を教えてくれませんか？」
「・・・すまないが俺達も」
「道に迷ってます」
リセラは唖然とした。妖精の尻尾の者達も道に迷っていたのだ。食べ物を失っただけで無く谷で遭難と言う失態にリセラは兎に角腹立たしかった。
「そ、そんな・・・」
「まぁ、大丈夫じゃろ。その内に出られる」
小さな老人が言うが途中で腹の虫がなって説得力が無かった。リセラはこのトラブルにどう対処しようか考える事になってしまった。

村を食う

妖精の尻尾のメンバーはナツ、グレイ、エルザ、ルーシィ、ハッピーそしてマカロフとリセラと谷をさ迷っていた。
「(どうしよ・・・結局、離れなるずに着いて行くはめになった)」
リセラは自身の不幸を呪う。相手は5人＋一匹と自分より数は多くしかもティターニアのエルザと妖精の尻尾のマスターにして幽鬼の支配者のマフラージョゼと互角の実力を持つと言われているマカロフがいる。
「(万が一バレたら八つ裂きにされる・・・)」
リセラは物騒な想像をしながら歩いているとハッピーが谷の下を見て叫んでいる。ナツ達とリセラは下を見るとそこには羽を生やした魚が奇妙な鳴き声を挙げて飛んでいる。
「オラ知ってるよ!あの羽魚は珍味だって依頼書に書いてたよ!」
珍味。その言葉を聞いてナツ、グレイ、エルザが反応し腹の虫を鳴らした。マカロフに至ってはハッピーな肩に手を置いて泣きながらよく見つけたと言う。
「皆、お腹すきすぎです・・・」
ルーシィがお腹を鳴らすメンバーにツッコミを入れるがルーシィもお腹の音を鳴らす。リセラもナツのせいで食料を失って腹を空かせていた。
「よぉし!釣るぞ!!」
リセラを含めてのメンバーで羽魚釣りを始めて数分、ハッピーがすぐに飽きた。その後、何とか一匹釣り上げる事に成功した。ナツが炎の魔法で羽魚を焼くとハッピーが食べろと言った。グレイもマカロフもハッピーに譲る。
「ハッピー。私も譲るわ。遠慮なく食べなさい」
ハッピーは羽魚を旨そうに食べ始めメンバー全員で空腹を堪える。
「まずッ!!」
結局、羽魚は食べれた物ではないらしくハッピーはすごい顔をした。リセラとナツ達は空腹の中を歩いていると今度は村を見つけた。

「村だ」
「家だ」
「だったら多分！」
「食い物だぁぁぁぁ！」
ナツ達は走って行ってしまいリセラは一人取り残された。
「置いて行かないでよ・・・」
リセラは村に歩いて入る。村は静かで人の気配すら感じなかった。リセラが村の広場まで来るとナツ達がいる。だがナツとグレイは食べ物を求めて家に向かってしまった。
「はぁ、何やってるのあの二人」
「あ、ははは・・・」
リセラが飽きれ気味に言うとルーシィは苦笑いを浮かべる。リセラ達はナツとグレイの行った家に向かうとナツがパンを食べようとしていた。
「待て」
「何だよ」
「様子がおかしい」
エルザの言う通り確かに様子がおかしかった。今、テーブルにある食べ物は全て食事をしようとしているような感じだった。それが何故、食べずに消えたのか不思議だった。ナツはそれでも食べようとしたがエルザの威圧にナツの手は止まる。
「まずは先に村の様子を調べる必要がある。今までガマンしてたんだもう少しがま」
エルザが我慢と言いかけた瞬間、エルザの腹の虫が鳴る。
「エルザお腹の音を鳴りすぎ・・・」
「説得力０じゃな」
エルザは二人の言葉を無視して指示を出す。ナツとグレイとルーシィとハッピーは何故かキノコを探す様に言われてエルザとマカロフとリセラは探索をする事になった。
「まったく・・・何で私が妖精の尻尾の奴と探索しなきゃいけないのよ」
リセラは文句を言いながらも探索をした。どの家も誰も居らずた

まに食べ物があるだけだった。
「やはり何があったと考えるべきか・・・」
　リセラは考え込んでいると部屋の隅に細い線を見つけた。そこを押してみると扉の様に開いた。俗に言う隠し扉だ。リセラが隠し扉から入るとそこには魔法の道具がわんさかあった。しかも違法な物ばかり。
「なるほどね。ここは闇ギルドの村か・・・」
　闇ギルド。解散を命じられたギルドが解散せずに残って悪行を重ねる言わば犯罪組織の様な物だ。違法な物を取り扱うのは闇ギルド位でこの村も闇ギルドの一つと考えた。リセラは考えを纏め終えた瞬間、不気味な呻き声が聞こえる。
「やっぱり何かしたのか。闇ギルドめ・・・」
　リセラは外へ出てエルザ達に合流する事にした。リセラが走って広場に行くとエルザ達の他にナツ達とも合流したが何故かキノコがハッピーの頭に生えてたが気にしなかった。合流してまだ短い時、建物が光って揺れた。グレイが魔法で対処しようとしたがマカロフが止めて確かめたい事があると言って高い場所に行く。高い場所に行くと建物が化け物へと変わった。
「マスター。あれは魔方陣では？」
「うむ、お前が見つけた線は魔方陣の一部だったのじゃ」
　リセラは下の化け物を見てすごい物だと考える。建物を生き物に変えて動かすその力は何とも言えない物だった。
「だが、これは好都合じゃ」
「何故ですか？こんな化け物が好都合などと」
　リセラはマカロフが言う好都合が何なのか分からないと言う顔をする。
「生き物は大抵は食べられる。だから調理して食うのじゃ！」
「えー・・・」
　マカロフの言葉にルーシィは愕然とする。だが、そこにナツ、グレイ、エルザ、リセラが反応した。リセラは忍耐強い方だがもう空腹に限界を感じていて何でも良いから食べたいと思っているのだ。

「成る程。なら・・・善は急げですね!!」
「あ!ずりぃぞ!!」
リセラは飛び出すとナツ、エルザ、グレイも続く。
「換装!!」
リセラは魔法を使うと両手に赤い魔銃を装備した。魔銃を化け物に向けると攻撃した。
「まずは焼肉かしらね。ファイアーバレット!!」
魔銃から炎の弾を発車して化け物を燃やす。リセラは再び換装すると今度は青い魔銃を取り出す。
「焼けたら火を消す。アクアバレット!!」
水の弾を飛ばして燃やした化け物を今度は消火する。丁度良い焼け加減で終わりリセラは満足げな表情をしてはいないが心の中では満足そうにしている。
え
「はい出来上がり」
ナツは化け物の蒸し焼きに、グレイは氷漬けにしてデザート風に、エルザは細かく切り刻んだ。リセラは取り合えず出来た化け物の肉を持っていたナイフで切る。
「頂きます」
肉を口に入れて噛んだ瞬間、かなりの苦味がリセラの口を襲った。
「・・・不味い」
リセラは何とか飲み込むと溜め息をついた。かなひの空腹だがこんな不味い物は食べたくないとリセラは心の中で叫ぶ。ナツ達も化け物の料理を食べて不味いと言っているのだから絶対に食べられない生き物だとリセラは確信した。
「もう帰りたい・・・」
リセラは心が折れかけた瞬間、化け物がまた出てきた。

迎え

ナツ達は鬱陶しそうに化け物を睨み付けると攻撃を始めた。ナツは手に炎を宿して攻撃し、グレイは氷の造形魔法と思われる魔法でエルザはリセラと同じ換装魔法だが剣や鎧を身に付ける。

「やるわね。なら、私も少し本気を出す。換装!!」

リセラは換装魔法で長身のある魔銃を取り出した。その魔銃の先には短剣が取り付けられている。リセラが武器を出し終えた瞬間、化け物がリセラに向かって襲いかかる。リセラは飛んで避けると化け物に切りつけた。

「はぁ!!」

リセラの攻撃は当たり化け物は一刀両断された。その他にもやって来るが魔銃を両手でしっかりと構える。化け物の身体に緑色の魔方陣が現れる

「バーストブレッド」

リセラは引き金を引きながらそう言うと緑色の弾丸が炸裂して化け物に襲い掛かる。周りにいた化け物達は一瞬で倒されるがまた出てきた。リセラはナツ達の元へ行き後ろを任せる。

「くそ、切りがねぇ!」

ナツがそう言った瞬間、地面が揺れた。

「今度は何!」

ルーシィがそう言うと化け物が出てくる地面が赤く光った。それは巨大な魔方陣でリセラは何か嫌な予感がした。

「逃げろ!!」

エルザが逃げろと叫んだが時既に遅く。地面は崩れてしまった。リセラは地面に落ちていく感じがしたその時、大きな魔力を感じてそこで気を失った。

「あ〜、腹へった・・・」

「オラ、もう一歩も歩けないよ」

「だから、自慢げに羽を使うな羽を」

リセラとナツは何も無かったかの様に歩いていた。リセラは気を

失う前の事を考えていた。大きな魔力を感じ気を失って起きた時には何事も無かったかの様に終わっていた。
「(恐らくこれはマスターマカロフの力だろう。あの巨大な魔方陣を消滅させテイクオーバーを解除。恐ろしい爺さんだわ)」
　しばらく歩くと一向の前に人の集団がやって来た。服に幽鬼の支配者の紋章を刻んでいる事から幽鬼の支配者だと思われる。
「貴様達は幽鬼の支配者か！」
「何の用だ」
　ナツ達はマカロフ以外は戦闘体制をとる。幽鬼の支配者の集団の一人がやって来てきてリセラの前までやって来た。
「支部長。到着があまりに遅いのでお迎えにあがりました」
「支部長だと！」
「お前、幽鬼の支配者の奴だったのか！」
　案の定、思いっきり警戒されるがリセラは振り返る。
「はい私は幽鬼の支配者の魔導師リセラ＝レクセリア。少しの間でしたが楽しかったですよ妖精の尻尾の皆さま」
「ふむ、やはりな。お主の戦い方を見て思いだしてのう。幽鬼の支配者には魔銃使いのギルド最強の女がいるとな」
「そんなふうに噂が伝わっているのですか。まぁ、良いです。さよなら・・・皆様」
　リセラは幽鬼の支配者のメンバーを引き連れて消えた。

支部長としての仕事

あの出来事から数十日が経とうとしていた。支部に着いて仕事の量は半端では無かった。書類整理に支部長同士の会合、依頼の受注等と大忙しだった。魔導師としての仕事は少なくなっている。

「はぁ、何でこんなに仕事があるのよ」

リセラは依頼をこなした魔導師達の記録を書いている。記録を残すのも大事な仕事な為、一文字たりとも間違えないようにしていた。

「支部長。お耳に入れておきたい事が」

「何？今は忙しいのよ」

「最近になって闇ギルドの奴等が俺達を舐めて喧嘩を売ってきている様なんですが？」

リセラがこの支部長に任命されたのは単に実力だけが理由ではないと到着して分かった。支部のある街はかなり荒んでおり闇ギルドやギャング等と犯罪組織が蔓延っておりリセラがここで奴等を潰す為にも送られて来たのだ。

「・・・はぁ、仕方が無いわね。私も出向いてあげるわ。お遊びが過ぎるとどうなるか教えてあげないといけないからね」

夕方、闇ギルドデーモンスピアの拠点。そこは原型が留めてはいない位に崩壊していた。デーモンのメンバーは幽鬼の支配者のメンバーに囲まれながら震え上がっている。

「闇ギルドデーモンスピア。お前達は我がギルドを汚そうとした。これは普通なら許されない大罪・・・」

リセラの言葉にデーモンスピアのメンバーは怯える。リセラの言葉の一つ一つが処刑宣告に聞こえ殺されると考えているかりだ。

「でも、あなた達に罪を償うチャンスをあげるわ。デーモンスピアなんて闇ギルドを辞めて私達、幽鬼の支配者の兵士になりなさい。良いわね・・・」

リセラの黒い笑みにデーモンスピアは了承する。リセラは邪魔な者は潰す達だが使える物全て使う人物となっていた。リセラが任せられている支部の弱点は人員不足でありこうして人員を確保しなけ

ればやっていけないのだ。
「まったく。これで仕事に戻れるわね」
リセラはメンバーを率いて支部へと戻る。その行列を見る者達は恐怖しリセラには恐怖の象徴として二つ名がついた。幽鬼の亡霊。意味はそのまま、気配を悟らせず相手を仕留め殲滅する事からついた。
「姉御！本部からの手紙ですぜ!!」
「本部から？何かしら・・・」
リセラは女性のメンバーから手紙を受け取る。珍しい手書きでの手紙でリセラは開いて内容を読むとリセラは目を見開いた。その内容はギルド同士の戦争に参戦する事を通達された内容だった。その相手は妖精の尻尾。
「まさか。早まったのですかマスター・・・」
この数十日、リセラは兵士を多くかき集めて勢力を拡大していたが精鋭揃いの妖精の尻尾を相手に戦争はやりたくなかった。始まれば泥沼の潰し合いになると分かっていた。
「・・・くっ、仕方が無い。本部へ行かないと」
リセラは立ち上がって身支度を始めた。
「支部長。何処へ行くのですか？」
「本部にちょっとね。心配しなくてもすぐに帰ってくるから・・・」
リセラは後ろを向きながら手を振って支部を出ていく。これがリセラが最後に支部長として行った事になるとは誰も考えてはいなかった。

幽鬼の支配者の解散

リセラは支部長として配属された時は徒歩で来たが今回は急ぎの為、汽車を移動手段に使っていた。リセラは窓の外を見ながらギルドの事を案じる。

「(相手は妖精の尻尾。例えどんなに小さなギルドでも奴等は例外的に強い。だが、マスターやガジルにエレメント4の皆なら私が着くまでに持ちこたえてくれる筈・・・だから持ち堪えて皆!)」

数時間掛けて汽車で移動して幽鬼の支配者の本部がある街に着くと急いで走る。リセラは息の続く限り走り続け本部に辿り着くとそこには何も無かった。

「本部が無い・・・どうして・・・・・・・」

「あなたリセラちゃん?」

リセラは振り向くとそこには何時も世話になっているパン屋のおばちゃんだった。

「おばちゃん!この状況は何なの!!どうして本部が無くなってるの!!」

「落ち着いて。幽鬼の支配者の本部は一人でに歩いて行ったわ」

「何処へ・・・?」

リセラは嫌な予感がして堪らなかったがおばちゃんに聞く。

「マグノリアの方向に」

「マグノリア・・・妖精の尻尾のギルド!」

おばちゃんの言葉を聞いて走り出そうとした時、評議会のルーンナイトの集団がこちらに向かってきていた。

「リセラ=レクセリアだな。貴様はギルド間の抗争に参加しなかったが関係者として同行して貰う」

「くッ・・・分かりました」

その後、リセラは軍の駐屯地で事情聴取を受けた。リセラが間に合わなかった戦いの結果は妖精の尻尾がギルドを破壊されながらも勝利し、幽鬼の支配者は壊滅的な打撃を受けたと言う。マスタージョゼはマカロフの魔法により精神的に大きなダメージを負ってまるで老

人の様に老けてしまったと言う。
「幽鬼の支配者が、負けた・・・」
リセラはルーンナイトに何度も事情聴取を受け続けやっと解放されると汽車に乗って支部へ帰還する。負けた戦争の埋め合わせをすぐに行わなければと考え支部に帰ってくると今度は崩壊した支部だった。崩れた支部にはもう誰も居らずリセラはその場に膝をついた。
「何で・・・妖精の尻尾?誰が襲撃を?」
リセラは考えているとふと、一つの張られた紙が目に入る。それは評議会の通達で内容はギルドの解散指事だった。
「分かってはいたけど。こんなのはあんまりよ・・・」
ギルド間の抗争は評議会に禁止されている。リセラには大義の無い抗争では勝てても解散させられる事は分かっていた。だが、妖精の尻尾は無罪で済んでだ。帰る場所を失い、権力も失った。
「運命よ!それほどまでに私が憎いの!!何で・・・何で私の大事な物を奪っていくのよ!!!」
リセラは泣き崩れ、その泣き声は街に響き渡たる。夜、リセラは気がつくと街をさ迷い歩いていた。道の後ろには気絶する集団が数多くいる。
「・・・私とした事が八つ当たりか。私を向かえてくれたギルドはもう無いしこれからは好きにさせて貰うから。マスタージョゼ・・・・・」
リセラは夜の闇に紛れて姿を消す。リセラが決めた場所は本部のあった元の自分の家に行くのだった。

亡霊の道筋

幽鬼の支配者が解散されてから既に何日か経過している。リセラは解散以降は本部にいる時に住んでいた家に一人で住んでいた。録に所属するギルドや仕事を探さず落ち込み続ける。

「マスター・・・みんな・・・・・」

仲間の安否は分からず机に伏せる。しばらくその体勢でいると扉を叩く音が聞こえた。リセラは今は誰とも会いたくないので無視を決め込んだがまた叩く音が聞こえる。

「・・・仕方ないか」

リセラは椅子から立ち上がると扉を開ける。だが、そこには誰も居らずイタズラかと思った瞬間、下に気配を感じて下を見ると。

「よぉ!久しぶりじゃの」

マカロフがいた。リセラは扉を素早く閉じて考える。何故、ここに妖精の尻尾のマスターであるマカロフがここにいるのか。報復に来たなら逃げなければと考えると激しく扉を叩いてくる。

「ちょっと待て!何で閉める!!」

「あなたは妖精の尻尾のマスターでしょ?何しに来た・・・」

「お前さんと二人で話をしたくての。別に報復ではないから安心せい」

マカロフの言葉にしばらく考えるとリセラはゆっくりと開ける。開けるとそこにはマカロフがニカッと笑っている。マカロフを部屋に入れると机に向き合って座る。

「で?二人で話とは」

「うむ、その前にお前さん。他の仕事をしておるか?」

「いいえ」

マカロフの仕事をしていないかと言う質問に疑問を浮かべるとマカロフはそうかと応える。

「お前さん・・・妖精の尻尾に来ぬか?」

「ッ!?ご冗談を!!あなた方は私の居場所である幽鬼の支配者を潰した。それなのにギルドを潰した相手のギルドに入れとは!!」

「これを読め」
普段は見せない感情を表に出して怒り狂うリセラにマカロフは一通の手紙を渡した。リセラはそれを受け取ると宛先はジュビアだった。
「ジュビア・・・？」
「わしが来たのはジュビアの紹介でもある。お前さんをこれ以上、一人にさせない為にとな。」
「しかし・・・」
「お前さんは力ばかり求めておるな？」
戸惑うリセラにマカロフはリセラが力を求めている事を見抜いた。リセラは黙り混む。
「力とは周りの全てを破壊する加減のきかん物ばかりじゃ・・・じゃがその力は別の方法でも得る事ができるぞ」
「その方法は・・・」
「それは自分自身で探せい。妖精の尻尾に来なくてもわしは別に構わんぞ」
マカロフはそう言うと椅子から立ち上がると扉を開けて外に出ていく。リセラはその後ろ姿を見て悩む。妖精の尻尾に行くと幽鬼の支配者を裏切ったかの様な感じがし、行かなければ唯一の友人であるジュビアの誘いを断ると言う事になる。
「私は・・・」
リセラは悩み決断をしてマカロフを追いかける。マカロフの言っていた別の方法での力の得かたを知る事も含めて。

妖精の尻尾へ

マグノリアの街でリセラはマカロフの後ろに着いていく。活気のある街にリセラは驚かされるばかりで周りに目を奪われてばかりだった。幽鬼の支配者の本部があった街は大きかったがここまでの活気は無かったので余計に新鮮に見えた。

「ここじゃ」

「これが・・・妖精の尻尾」

リセラの目の前に幽鬼の支配者の本部ほどではないが大きなギルドだった。マカロフと共に扉を開けて入る。中は笑い声が大きく聞こえる。

「帰ったぞ！」

「あら、マスターお帰りなさい」

マカロフを出迎えるのはソーサラーでグラビアをやっていると言うミラだ。リセラは雑誌を見せられて話を聞いてるはいる。

「こちらの方は？」

「今日から入る新人じゃ。名はリセラじゃ」

「リセラ？」

ミラの声でリセラの名を聞いた妖精の尻尾のメンバーから思われる笑い声は突然止まった。

「おい、あの血も涙も無いて言うあの幽鬼の亡霊か・・・？」

「まじか・・・」

ひそひそ声で聞こえる言葉にリセラは自身の行動を思い返す。確かに容赦なく相手を潰してきたが問題を出してはいない。悪評がつく様な事をしてギルドに迷惑は掛けたく無かったからだ。なのに自分の名前を聞いてこの有り様だった。

「うむ、登録を頼むぞミラ」

「は、はい！」

リセラはミラに連れられて登録をする。そして、左の肩に赤い妖精の尻尾の紋章をスタンプで付けてもらう。

「はい。これであなたも妖精の尻尾の一員よ」

「ミラさん。私は先の抗争以外で妖精の尻尾に何かしたのですか？」
　リセラはミラに妖精の尻尾のメンバーの笑い声が止まった事が気になって聞いた。ミラは少し困った顔をして話す。
「何でもないの。あなたが戦争に参戦してたら妖精の尻尾は負けてた、て皆が噂していただけだから」
「何故、私が参戦してたらあなた方が負けると？」
「あなたは少なくともエルザと互角の速さで換装で妖精の尻尾の猛者とも比毛をとらない実力だってマスターが言ってたから」
　蜘蛛の巣谷のあの時にマカロフが自分の戦闘を見ていたのだろう。だが、それが何故血も涙も無い奴になったのか分からない。
「じゃあ、何で血も涙も無い奴になったの？」
「それはあなたの噂が組合わさっただけよ。マスターの話を聞いて噂がどんどん脱線しちゃったみたい」
　ミラが笑顔でリセラに応える。リセラは無表情だがじぶんの噂に唖然とした。ミラは元の仕事に戻っていきリセラは一人で一階のテーブルの側にある椅子で座っている。
「（・・・ジュビア何処だろ）」
　ジュビアの事を案じていながらうつ伏せになりながら眠ってしまった。落ち込んでいる時はまともに寝ていなかったのでその付けが来たのだ。リセラは深い眠りにつく。
「・・り・・・さん・・・リセ・・・・・・リセラさん！」
　眠りこけていたリセラは誰に揺すられながら起こされているのを感じた。リセラがゆっくりと体を上げて揺すられた方向を見ると青い髪で白色の服と帽子を着ているジュビアそっくりな少女が心配そうに見ている。
「・・・だれ？」
「ジュビアです」
「もう一度言って。何て？」
「だからジュビアです！」
　リセラは思考が停止した。明らかに表情が豊かな少女がジュビアだと名乗っている。リセラが知っているジュビアはもっと無表情で

ネガティブな人物だ。
「そんな筈は無い。だってジュビアはかなり暗くてどんよりとしてたもの」
「ひどいです!リセラさん!」
ジュビア（？）が泣きながらリセラに文句を言う。リセラは無茶言うなと思っていると見た顔をした集団が来た。
「お前はリセラか？」
「お久しぶりですエルザさん」
「あぁ、久しぶりだな・・・」
リセラが丁寧に挨拶してエルザも挨拶を返すがぎこちなかった。ジュビアはだと言うとジュビアも挨拶しているが何故かルーシィだけ睨み付ける。
「お前もこのギルドに来てたんだな」
「ええ、あなた方のマスターに誘われて。私は今日ここに入ったのですが仕事に行こうと思います」
「初日から行くのか？」
「えっと、リセラさんは真面目でどんな状態でも仕事に行こうとするんです」
ジュビアの説明でリセラがかなり真面目な部類に入る人物だとナツ以外のメンバーは認識した。
「いいじゃねぇか初日ぐらい。今日一日位はゆっくり過ごそうぜ!」
「いや、仕事に・・・」
「そうですよ!それで前に倒れた事があるじゃないですか」
「・・・分かった」
ナツとジュビアの二人の説得でリセラは思い止まった。

収穫祭の前夜

リセラが妖精の尻尾に入ってから収穫祭の準備に入っている。妖精の尻尾ではミス・フェアリーテイルコンテストが行われる様だがリセラは換装は兎も角だがビスカの魔銃での芸が絶対に被るのと目立つので参加はしないと思っていた。

収穫祭の前夜、リセラは女子寮を借りておりそこでいつもの様に武器の手入れをしていた時、扉が叩かれる。

「誰ですかこんな夜更けに」

リセラが文句を言いつつも扉を開ける。そこには性格が大幅に変わったジュビアがミス・フェアリーテイルコンテストのチラシを持って立っている満面の笑顔で。リセラは扉を閉める。

「ちょっとリセラさん！何で閉めんるですか！」

「私は参加しないから。あんな満面の笑みを見せても駄目だから」

扉を激しく叩いてくるジュビアにリセラは応える。リセラは必死に扉を押さえていると何か外が騒がしくなる。

「ジュビア。この女子寮は他にも人がいるのよ。静かにして」

「ジュビアはリセラさんが入れてくれるまで止めません！」

「おいリセラ。ジュビアとは友人だろ？中に入れてやってくれ」

リセラはジュビアと騒ぎを聞き付けて来たエルザに言われて扉を開ける。外は涙目のジュビアとエルザ、レビィ、カナ、ビスカ、ラキがいる。リセラは頭を何度も下げて謝りジュビアを引っ張り中に入れる。

「このおバカ!!人様に迷惑を掛けてどうするの!!」

「ごめんなさい～」

リセラは説教モードに入ってジュビアを説教をする。しばらくジュビアは正座でリセラのお説教を受ける。お説教を終えるとミルクティーをジュビアに出す。

「それで用件はミス・フェアリーテイルコンテストの件よね？」

「はい・・・一人では心細くて。一緒に参加できないかなと思って・・・」

「無理よ。私の魔法は知ってるでしょ？ビスカと絶対に被る」

リセラはジュビアの誘いを冷たくあしらって自分の分のミルクティーを飲む。
「でもリセラさんは他の魔法も使えるじゃないですか！姿を消したり気配を断ったりとか」
「いや、コンテストに向いてないし・・・」
リセラは魔法を固定してはいない。リセラは換装の他に多種多様な魔法と技で幽鬼の支配者最強の女魔導師になった。だが、メインはやはり魔銃系の物に限られているのだ。他の魔法を代用しても上手くいくかリセラ自身でも分からない。
「大丈夫です！姿を消してその場でいつもの服から水着になるとか」
「それ、人前で着替えろとでも言うのジュビア？」
リセラは無表情で殺気を飛ばしてジュビアを威嚇する。威嚇に当てられたジュビアは慌てる。
「ち、違いますよ！最初から水着を着てれば脱ぐだけで終わりますよ！」
「・・・その手があったか」
ジュビアの必の言い訳にリセラは納得する。ジュビアは誤魔化せたと言わんばかりに溜め息をつく。
「はい！だから一緒に参加しましょうよリセラさん」
「・・・はぁ、やれば良いんでしょやれば。また騒がれるのは嫌だし参加してあげるわ」
「ありがとうございます！ジュビアは嬉しいです」

収穫祭の始まり

ジュビアからの誘いを受けて翌朝、収穫祭が始まり街はお祭りムードとなっている。リセラはというと街の店で水着を選んでいた。そこに通り掛かったエルザがリセラを見つけた。
「リセラ」
「エルザさん」
エルザはリセラに話しかけた。何故、リセラが水着を見ていたのかが気になった為だ。
「どうして水着を見ているのか気になってな」
「はい。実は私もミス・フェアリーテイルコンテストに参加する事になったのですが、私は今まで仕事人間でしたので水着とかそういう物は持って無いんです・・・」
リセラが無表情で応えるが内心は恥ずかしくて堪らずにいる。
「なるほど・・・なら私が見立ててやろう」
「いや、大丈夫です。自分で選べますから」
「乗り掛かった船だ。遠慮するな」
「・・・わかりました」
エルザの笑顔を見て引くに引けなくなったリセラはエルザに水着を見立ててもらう事になった。先ずは青色の色っぽいビキニの水着を渡されて試着させられる。リセラは服と下着を脱いで水着を着るとエルザに見せる。エルザは最初は笑っていたが違和感を見つけた。
「ん?リセラ。お前の右肩どうした?」
「これはちょっとした怪我よ。気にしないで」
リセラの右肩には白い包帯が巻かれている。リセラの右肩には未だに幽鬼の支配者の紋章が刻まれている。妖精の尻尾に入ってからは包帯を巻いて怪我という事にしていた。
紋章は消せない事はないが、消したら今までの想いが無くなるのではという恐怖がリセラを襲って消せずにいる。妖精の尻尾に入ってからは包帯で隠している。
「そうか。水着の方はどうだ?」

「はい。良い位ですが・・・」
「ふむ、何か違うのか?ではこれはどうだ」
　エルザが次に渡したのは可愛いげのある白色のレディースの水着だ。リセラは青色のビキニの水着を脱いで白色の水着を着る。
「どうだ?」
「うーん・・・胸がきついです」
　リセラは胸を触ってきついと言う。エルザはリセラは着痩せするタイプかと思っている。色々と試着する中で服の色と同じのフリルの付いた赤いビキニを選んだ。
「色々とありがとうございます。お陰でコンテストに間に合いそうです」
「いや、困っていたら助けるのが仲間だ。では私はギルドに先に戻っている」
　エルザはそう言うとギルドへと歩く。リセラは買った水着を持って準備する為にギルドに行く事にした。そして開催時間となりギルドの舞台で司会役のマックスが立つ。
「マグノリアの町民の皆さん及び近隣の街の皆さん・・・お待たせしました!!我が妖精の尻尾の妖精達による美の競演!!!ミス・フェアリーテイルコンテスト開催でーーーーーす!!!!」
　マックスが高らかに宣言して会場は盛り上がる中、ギルドのメンバーの一人がマックスに耳打ちする。マックスは耳打ちの内容を聞いて驚く。
「えぇ、すみません。一つ報告がありコンテストに参加する筈のリセラはまだ来てはいない様なのでリセラは最後での披露となります。また、最後になっても来なかった場合は失格とします!」
　開催宣言をマックスが言ったがリセラはまだ来てはいなかった。
「おかしい・・・リセラとは水着を買って別れたのだがな」
「でも来てないんでしょ?何処に行ったのかしら・・・」
　コンテストに参加するエルザ、ルーシィ、レビィ、ビスカ、カナ、ミラはリセラの事を心配していた。だが、ジュビアは知っていた。リセラがかなりの方向音痴である事を。

「まさか、ここで道に迷うなんて・・・リセラさん早く来てください～」
その頃、リセラは必死でギルドのある方向へと出ようとしているがギルドからどんどん離れて行く。
「こんな事ならエルザさんに着いて行けばよかった・・・」
リセラは道を探すがどうしても分からず時間だけが過ぎていく。
リセラは走り続けていると分かれ道で誰かとぶつかった。
「すみません」
「いや、こちらも注意していればぶつからなかった。すまない」
リセラはぶつかった相手を見ると男で長い緑の髪に雷の様な触角を生やしで赤い服を着ておりサーベルを腰に差している。男は立ち去ろうとするとリセラは止める。
「あの、妖精の尻尾はどちらに行けば良いのでしょうか？道に迷ってしまって」
「うむ、それなら私も行く所だ。一緒に行くか？」
「はい。おねがいします」

バトル・オブ・フェアリーテイル～1～

リセラは男に連れられてやっとギルドに到着した。ギルドの目の前まで来るとリセラはお礼を言う。
「ありがとう。お陰で間に合った、と思うわ」
「いや、気にするな。ではまた・・・」
男はギルドへと入っていきリセラはギルドの関係者なのかと思いつつも裏口からギルドの舞台へとに行く。
「ごめん遅れた」
裏口から入ったリセラは舞台裏まで来たが誰もいないむしろ静かだった。これが休暇なら良いものだがコンテストでは明らかに不自然だった。リセラは舞台を覗くと舞台はおろかギルドの中はがらがらに空いており、それどころかコンテスト出場者が石化していた。
「うそ・・・何でこんな・・・・・・」
石化しているコンテスト出場者の中にはジュビアも含まれている。リセラを怒りで染まらせるには十分だった。友人を尊重し大切にするリセラは怒り狂う。
「誰が・・・誰がこんな事をしたーーーー!!!」
「む!?おぬしはリセラか。無事だったのじゃな!」
リセラが叫んだ時、マカロフとナツがいた。リセラは怒り狂いながらマカロフに詰め寄る。
「マスターー!誰がこんな事を!!」
「・・・ラクサスと雷神衆だ。おぬしはラクサスと雷神衆と知っておるな?」
「はい。幽鬼の支配者にいた時に噂は聞いていました」
リセラはそいつらが原因とみて考えた。マカロフは頷いてこの事件を話す。ラクサスがゲームとしてバトル・オブ・フェアリーテイルを開催しラクサス及び雷神衆とぶつかれば戦うと言うルールで事が起こり今、メンバー達がラクサスを止める為に外へ出ていったのだ。
「ルールでわしは出られず、ナツも何故か出られぬ・・・すまぬがラクサスを止める手伝いに行ってくれるか?」

「ええ、望む所です・・・私の友人ジュビアさんを石にした代償を払わしてやりますよ」
　リセラは普段は出さない感情を顔に出して外へ出る。マカロフの説明にあった術式にリセラが参戦したと言う内容がラクサスへ届く。
「ほぉ、幽鬼の亡霊が参戦したか。だが、たかが亡霊に俺を止められるかな？」
　ラクサスは不適に笑い戦況を見守る。リセラは街の外へ出てしばらくすると、道に迷う。
「ここ何処・・・？」
　リセラは歩いているとアルザックが歩いている。リセラは声を掛けようとしたが何か様子がおかしかった。
「(何かしらこの空気は・・・)」
　リセラは様子を見ているとアルザックが気がついたのかリセラの方を振り向く。
「リセラか・・・」
「アルザックさん、だったけ？何でそんなに殺気だっているの？」
　リセラはアルザックが殺気だっているのを感じたその瞬間、術式が現れて閉じ込める。文字の内容は一番強い者が通る事を許可すると言う内容でリセラは瞬時に理解する。
「成る程ね。つまりあなたは潰し合いの真っ最中だったのね・・・」
「ごめん。僕はどうしてもビスカを助けたいんだ」
「ビスカさんか・・・彼女も石になってたのを見たわ。だけど、私は友人であるジュビアを助ける。例えあなたの想いを踏みにじってもね・・・・・・」
　リセラは良い終えると鋭い目でアルザックを睨み付ける。アルザックはリセラから発せられる強大な魔力と殺気に怯んだ。アルザックは咄嗟に魔銃を構えたがリセラが消えていた。アルザックはリセラを探していると後ろから気配を感じて振り向く。
「遅い」
「ぐわッ!?」
　いつの間にかアルザックの後ろに回り込み回し蹴りを繰り出すリ

セラ。回し蹴りをもろに食らったアルザックは吹き飛ばされて気を失う。アルザックの気絶はリセラの勝利と見なされたのか術式は解除されていく。

「ごめんね」

リセラはアルザックを置いて先へと進んで行く。

バトル・オブ・フェアリーテイル～2～

アルザックを撃破したリセラは静かに獲物としているエバーグリーンを探す。途中、他のメンバーと戦うがリセラはメインの魔法を使わずに一撃で終わらせる。
「エバーグリーン。どこにいる」
リセラは静かに殺気を出して探していると激しい音と共にテイクオーバーの魔法を使った目隠ししたエルフマンが飛んできて建物に突っ込んだ。飛んできて方向を見るとエバーグリーンが宙に浮いておりその場を立ち去ろうとしていた。
「見つけた・・・」
エバーグリーンはエルフマンに圧勝して終わらせ次の相手と戦う為に移動しようとしたが死角から二発の魔弾が飛んでくる。エバーグリーンは一発は回避したがもう一発は当たってしまい家の屋根に落ちる。
「ぐッ、誰よ不意打ちしたのは!!」
「私よエバーグリーン・・・」
エバーグリーンは振り向いた瞬間、強力な一撃を受け吹き飛ぶ。
「ぐふぁッ!?」
エバーグリーンは建物にぶつかって止まり攻撃を受けた方向を見た。そこにはショットガン型の魔銃を持って無表情で睨むリセラがいた。
「あなたが幽鬼の亡霊ね・・・気配を悟らせず常に相手の意表を突く戦術を行うあの卑怯者の・・・・・・」
「今すぐジュビアとコンテスト参加者の石化を解きなさい。さもなくば殺す・・・」
殺気だっているリセラに対してエバーグリーンは笑う。リセラはそのエバーグリーンの余裕にリセラは疑問を抱く。
「殺す?妖精の尻尾の真の妖精であるこの私を?なら、あなたも石になって朽ち果てなさい!!」
エバーグリーンは眼鏡を外す。エバーグリーンは目を直接見つめ

合った者を石変える。リセラは咄嗟に目を瞑るがエバーグリーンの攻撃をもろに受けた。
「あっははは!さっきの威勢はどうしたの?そんなんじゃエルフマンみたいになるわよ!!」
　エバーグリーンは目を瞑るリセラに攻撃を仕掛けるがリセラは右に避ける。エバーグリーンの攻撃は全て当たらずじまいになって。
「な!?何で見えてないのに避けられるの!」
「簡単よ。魔力と気配を辿って避けたの。私は暗闇でも戦う仕事の方が多かったから自然と身に付いたの」
　エバーグリーンはリセラの言葉に動揺しているとエバーグリーンの周りに魔方陣が張られそこから色々な魔銃が出てくる。
「最後のチャンスよエバーグリーン。石化を解きなさい・・・さもなければ蜂の巣にするわよ」
「だ、誰が・・・」
「そう・・・じゃぁ、さよならエバーグリーン」
　リセラは右手をゆっくりと頭上にあげて指を鳴らす体勢に入る。エバーグリーンは目の前のリセラが死神に見えて仕方がなく心の底から恐怖した。
「ち、ちょっと待っ」
「バスターガンバレット」
　リセラは技を言うと指を鳴らしそれを合図に召喚された魔銃が一斉発射する。
「き、きゃぁぁぁぁぁぁぁ!!」
　エバーグリーンは死を覚悟して目を瞑り震えるが何処にも被弾した後は無かった。それ所か抱き抱えられている。
「やり過ぎだぞ・・・」
「・・・エルザさん。石化されていたと思ったのですが・・・・・・」
　リセラはエルザが石化から解けたのを不思議に感じている。エルザはエバーグリーンを降ろすとリセラを睨む。
「もう止さないか。エバーグリーンはもう脱落している・・・」
「それでも肝心の石化が解けたと言う確証はありませんよね?退いて

ください・・・今すぐにエバーグリーンを殺して石化を解きますから」
「どうしても殺す気か・・・なら、お前を倒すリセラ!!」
「やれるものならやってみてください・・・ティターニアのエルザ」
　妖精の尻尾最強の女と幽鬼の支配者最強の女が今、己の正義の為に戦わんとしていたがエバーグリーンが叫ぶ。
「分かったから!!石化を解くからもう命を狙わないで!!お願いだから!!!」
「・・・分かった。早く解きなさい」
　エバーグリーンの一言が二人を敵対から遠ざけた。
「リセラ」
「何でしょ」
「お前は友人思いなのは分かった。だが、殺すのはやり過ぎだぞ」
「・・・すみません。頭に血が上りすぎた様です。私はラクサスを探しに行きますのでこれで・・・・・」
　リセラはエルザに解釈すると建物の屋上から飛び降りてラクサスを探しに行く。エルザはリセラの背中を見ているだけしか出来ず手を強く握った。

バトル・オブ・フェアリーテイル～3～

リセラはエバーグリーンを撃破して後の事をエルザに託しからラクサスを探していた。しばらく歩き回ったリセラは徐に空を見ると雷のラクリマが浮いていた。

「何かしら？」

リセラはラクリマを見て何か嫌な予感を感じた。不吉な雰囲気を醸し出すラクリマを見てリセラは走り出す。

「ラクサスという人。一体何を考えているの？」

リセラは走り続けると黒い光と衝撃が受けた。リセラの目の前に術式でミラジェーン対フリード共に戦意消失の書かれた。二人のどちらかの魔法か分からないが街には特に影響は無かったのでリセラは再び走り始める。

「あとはラクサス・・・ただ一人」

リセラは考えているとカルディア大聖堂が爆発した。カルディア大聖堂には強大な魔力を感じ取ったリセラは急いで向かう。リセラは大聖堂に向かっていき中に入る。

「ラクサス!!!」

リセラの他にエルザとナツが同時に入って来ていた。

「エルザ」

「ナツ。出られたのか」

二人を見たリセラは視線を外して顔を隠した魔導師とラクサスを見た。強大な魔力を感じる事から二人は相当な手練れと感じとり油断なく身構える。エルザとナツは顔を隠した魔導師を見た。

「誰だお前・・・」

「ミストガンか？」

リセラはミストガンと言う単語を聞いて目を見開く。妖精の尻尾に来る前に聞いた噂だが幽鬼の支配者の支部は全てミストガンが潰したと言う噂だった。リセラはミストガンを睨む。

「あの人がミストガンなのね」

リセラは復讐したいという理性を必死に抑える。ミストガンはエ

ルザを一瞬見ると顔を隠そうとした。
「隙あり!」
ラクサスがミストガンの顔を攻撃する。攻撃の影響でミストガンの隠された顔が見える様になってリセラはその素顔を見る。その顔は青色の髪で顔に何かの刺繍を入れた顔をしている。
「ッ!?ジェラール・・・」
「お前・・・!」
二人はミストガンの事を知っているのか、かなり動揺している。
「エルザ。あなただけには見られたくなかった・・・」
リセラは話に全く着いては行けなかった。三人が何の話をしているのか分からないままでミストガンは消えた。残ったのはエルザとナツとリセラそしてラクサスの四人となった。
「えぇい!後回しだ!!ラクサス勝負しに来たぞ!良いよなエルザ、リセラ。俺がやる!!」
ナツがラクサスは自分が相手をすると言ってエルザを見るがエルザはまだ動揺していた。ナツはエルザに叫ぶがラクサスの電撃をまともに受けた。
「ラクサース!俺が相手をするて言ってるだろ!この野郎!!」
「ん?いたのかナツ」
ラクサスが皮肉たっぷりにナツにいたのかと言うとナツは固まる。
「舐めるのも大概にしろよ」
ラクサスは笑うとナツはラクサスに向かって炎を纏った拳でラクサスを攻撃するのだった。

バトル・オブ・フェアリーテイル～4～

ナツとラクサスが戦闘になってからラクサスが殆ど一方的な戦いをする。お互いの腕を掴み合い残った手で炎や雷を纏わせて殴り合う。ラクサスは今度はナツの腕を捻って倒し雷の纏った拳で殴ろうとしていた。ナツは回し蹴りでラクサスを攻撃するが避けられて逆に雷を纏わせた足で踏まれる。

ラクサスは追撃と言わんばかりに雷の纏った拳でナツを吹き飛ばす。ナツは耐えて体勢を立て直そうとした瞬間、飛んできたエルザに押さえられる。

「換装!」

エルザは換装してラクサスに斬りかかる。お互いに譲らない戦いは激しく再び換装して雷の扱える鎧を身に纏う。ラクサスとエルザの戦いは互角だった。

「エルザ。何ヤル気満々になってやがるんだ!ラクサスは俺がやるって言ってるだろ!」

「・・・信じて良いのだな?」

ナツの言葉を聞いたエルザは外へと走り出す。リセラはその行動が何なのか悟った。ラクリマを一人で破壊するつもりなのだと。ラクサスはラクリマ一つ一つが生死に関わる程の威力を持っていると言ったがエルザは止まるつもりは内容だ。

「エルザさん。私も行きます」

「リセラ・・・分かった行こう!」

エルザと共にリセラはラクリマ破壊の為に走る。途中、ラクサスが何か叫んでいるが構っている暇が無いので無視した。エルザと共に広場に行くとエルザは剣を、リセラは銃を、と武器を展開する。

「ぐぅッ!」

流石のリセラもエルザのお陰で数は半減しているとはいえ多くの銃をだすのは厳しかった。エルザもかなりの数の剣や斧、槍を出しているが厳しそうだった。

「はぁはぁ、全てを同時に破壊するには・・・」

「ま、魔力が・・・持たない・・・・・」
　エルザとリセラの限界を超えようとしていた時、頭に言葉が響く。
『おい、聞こえるか！上を見ろ!!くたばってる奴はさっさと起きやがれ!!!』
「・・・オーレンか？」
「オーレン・・・？」
　オーレンと言う名前にリセラは首を傾げる。
「オーレンはテレパシーを使う魔導師だ。そのオーレンのテレパシーでこうして連絡する事ができる」
「そんな人がいるんだ」
　リセラは武器の展開に集中しつつも感心する。オーレンは妖精の尻尾のメンバーにラクリマを一斉に攻撃して壊すように言う。
「オーレン。お前、何故神鳴殿の事を？」
『その声はエルザ！無事だったか！』
「グレイ！そうかお前が」
　他のメンバー達がエルザの無事を聞いて口々に他の参加者の無事を確認する。ジュビアの無事はエルフマンの口から伝えられリセラは安堵した。
『すまねぇ、俺のテレパシーはギルドまでは届かねぇ。とにかく聞こえている奴だけでも良い。あの空に浮かんでいる物を』
『オーレンてめぇ!!』
　オーレンが捻話で話しているとマックスが割り込む。マックスはオーレンにやられたのか怒りを露にしてオーレンに言う。それが切っ掛けで次々と言い争いが勃発していく。
「(妖精の尻尾のメンバーも所詮は人間か・・・非常事態の時に人にやられた事を言って)」
　リセラは呆れて何も言えないでいると一人が皆聞いてと叫んだ。その声の主はルーシィかと悟った。ルーシィの一言でメンバーの言い争いは止まった。
『今は喧嘩してる場合じゃないの！このままじゃ街の人達も危ないのよ。皆で協力して街の皆を守らなきゃ!!』

ルーシィの言葉にリセラは静かに耳を傾ける。ルーシィの言葉は心の何処かに突き刺さる感覚を覚える。
『皆で力を合わせればどんな困難でも乗り越えられる！それを私はここに来て教わった。私はまだ妖精の尻尾に入ったばかりだけど・・・このギルドを思う気持ちは誰にも負けないつもりよ。妖精の尻尾はずっと昔から私の夢・・・私の憧れだった。今でもそう。お願い・・・皆力を合わせて私達のギルドを・・・私達の街を守ろう!!!』
ルーシィの叫びはリセラに大きく響いた。今で感じた事の無い物でリセラは不思議に思った。
『それが駄目なら・・・私一人でもラクリマを全部壊すわ！』
ルーシィの言葉に次々と同調していくメンバー達が現れて団結していく。
「(これが・・・妖精の尻尾・・・・・・・)」
リセラは再度集中して魔銃を展開してラクリマに標準を向ける。
「北は私とリセラがやる！皆は南を中心に各個撃破!!」
エルザの言葉でメンバー達の魔法がラクリマへと飛んでいく。リセラも標準を合わし終えて攻撃を開始する。
「バスターガンバレット！」
リセラは展開していた魔銃を発射した。多くの魔弾がラクリマへと飛んでいく。
「行け！剣達!!」
エルザも剣をラクリマへと向けて飛ばす。ラクリマはメンバーの攻撃で次々と破壊され雷が街を襲う事なくを終えた。
「やった・・・」
リセラは破壊されたラクリマを見て安心したが雷がリセラを襲った。かなりの痛みが襲い掛かって堪らずリセラは倒れる。リセラは意識が朦朧とする中でエルザに話し掛ける。
「くッ・・・二度とこんな事は御免よエルザ・・・・・・」
「ふ・・・あぁ、そうだな・・・・・・」
エルザの言葉を聞いてリセラは微笑むとそのまま気絶した。

バトル・オブ・フェアリーテイルの終幕

リセラは目を覚ますとギルドの医務室のベットだった。身体中に包帯が巻かれて痛々しい状態だったが痛みを堪えて起き上がる。
「私はあの時・・・」
リセラは頭を押さえて気絶した理由を思い出そうとする。記憶が曖昧で思い出せずにいると扉が開かれてミラが入ってきた。
「あら目が覚めた?」
「ミラさん・・・私はどうしてこんな大怪我で気絶したのでしょうか?」
「あなたは神鳴殿のラクリマを多く破壊して気絶したの。気絶した後に他の人達が見つけてあなたを運んだのよ」
「・・・そうですか」
リセラはミラの言葉を聞いて思い出したかの様に記憶が甦る。激痛を伴ってその後、気絶してしまったのだ。
「(情けない・・・)」
リセラは自分もまだまだ、だと認識してベットから降りようとした瞬間、体に激痛が走る。
「うッ・・・!?」
「こら!あなたは一様重症なんだからしばらく休んで。」
ミラに怒られてリセラはベットに寝かされる。
「そうえば他の皆は?」
「皆は無事よ。エルザもあなたと同じ位のダメージを負ってたけどピンピンしてるわ」
笑顔でエルザがピンピンしてると言うミラにリセラは本当に自分が情けなく感じた。リセラがベットで右向きになって見るとマカロフが座っていた。
「よぉ!やっと気づいたかの?」
「何時からいたの?」
「え?リセラがここに運ばれる前からだけど・・・気づいてなかった?」
ミラが笑顔で言う。リセラもまさかマカロフまで医務室で休んでるとは思ってはいなかったのでかなり驚いている。

「お主、体を張ってよく街を守ってくれた。礼を言うぞ」
「成行ですよ。ジュビアを助けられて次いでだからやったまでです・・・」
リセラがそっぽを向いて言う。マカロフは笑って言う。
「成行か。だが、お主も心の何処かで守りたいと思ったのではないのか？」
「ッ・・・そんな事は・・・・・・」
「よいよい誤魔化さんくても・・・それがお主の本当の本質であり求めていた力じゃ」
「本質が力？」
マカロフの言葉にリセラは首を傾げる。
「人を想う気持ち、仲間を想う気持ちは見せかけの力よりも強い物であり人を傷つけていく物より守る物方が強い力を発揮できるのじゃ」
「それが別の方法で手に入る力ですか？」
「そうじゃ・・・」
リセラは自分の手を見る。今まで多くの血で汚した手を見て自分にそんな想う気持ちを持って良いのか分からなかった。楽園の塔で最初に殺してからギルドを汚した者を誅殺し続けたこの手でと。
「マスター私は・・・」
リセラが言い掛けた瞬間、扉が開く。入ってきたのはラクサスだった。

収穫祭終夜

ラクサスが部屋に入ってきた事により医務室は静粛に包まれた。ミラは他に用がある為、医務室を出た為にリセラは重い空気の中で居なくてはいけなくなった。

「ラクサス・・・今回お前のした事は許される物ではない」

「じじぃ・・・俺はギルドを強くしたかっただけなんだ。このギルドを悪く言う奴の言葉を聞いてるうちに・・・・・」

リセラはラクサスは本当はギルドや仲間を想う不器用な人物だと改めた。最初の第一印象は災厄だったがラクサスの顔を見る限りはかなり後悔しているようだ。マカロフは真剣な顔でギルドとは何かをラクサスに説く。ラクサスは最後までマカロフの言葉を聞いて最後にマカロフは決断したかの様に右手を切る様に横に伸ばした。

「ラクサス・・・お前を破門とする!」

マカロフに破門ん言い渡されたラクサスの顔は悲痛ともとれる表情だった。ラクサスは背を向けて外へと出ようとして最後にマカロフに何かを告げた。マカロフは窓を見ながら肩が震えている。

「出ていけ」

マカロフはラクサスにその一言を言ってラクサスは出ていった。リセラはマカロフが肩を震わせていながら立ち続けるその姿に何とも言えない表情で見ていた。

「すまんかったなリセラ。こんな重い空気の中にいさせてな・・・」

「いいえ・・・」

マカロフは医務室の扉を開けて外へと出ていく。一人残されたリセラは窓の外を眺める。夕日が射し込むその空は何か悲しげに見えて仕方が無かった。

「はぁ・・・」

リセラは退屈しつつもベットで横になった。時間を大きく飛ばして、明日の夜となりファンタジアが行われた。花火が撃ち上がるなか山車が街を進む。その山車の上で妖精の尻尾のメンバーが魔法や躍りを披露する物もある。見物人の中に身体中に包帯を巻いていなが

らもファンタジアを見ているリセラもいた。
　その披露する側にジュビアもいてグレイと共に氷の城にジュビアの水で文字を作る物もあった。
「やるじゃないジュビア・・・」
　リセラは自然と笑顔になってファンタジアを見続ける。次に来たのは山車に乗ったマカロフだった。何か妙にファンシーでコミカルな動きを見せる。しばらく進んだ後、右手をピストルにして甲を見せて挙げる。
「(何の意味があるか分からないけど・・・きっとラクサスへの物ね)」
　リセラはファンタジアを最後まで見ずに女子寮へと足を進める。暗い道を進んで行くなかでリセラは考える。マカロフに言われた本質。リセラの心の奥底に想う気持ちを持っていると言われたがリセラは思い詰める。
「(私は・・・私には人を想う資格は無い。私の手は血で汚れすぎているのたから・・・・・・)」

仕事

収穫祭が終わってから数日、怪我を完全に直したリセラは良い仕事が無い為、ギルドで本を読んでいた。
「よぉ。リセラ」
「ガジル・・・」
リセラは元同僚のガジルに話しかけられた。リセラは面倒な相手に絡まれたと内心想いつつも読書を続ける。ガジルは向かい合って座る。
「で？何の様なのガジル。私は今見た通り読書をしてるの」
「何だよ。折角仕事を見つけてきてやったのによ」
「仕事・・・？」
リセラは面倒くさそうにガジルに言う。
「あぁ、何でも羽魚を手に入れる話なんだけとよぉ。報酬は１００万て所だ」
「私パスで・・・」
「何でだよ」
ガジルの何故と言う言葉にリセラは黙っている。リセラはあの時の苦痛を思い出したくなく。羽魚は空腹のトラウマを思い出すので避けて通りたかった。
「取り合えず嫌だから」
「とは言え家賃大丈夫なのか？まだ仕事すらしてないんだろ？」
「うッ・・・」
「ふん、図星か」
リセラは悔しいと思う感情を出さず頷く。ガジルはそれを見て笑う。
「だったら決まりだな。じゃぁ」
「一つ条件がある」
「何だよ条件て・・・」
「ジュビアも同行させる事」
「ジュビア？あぁ良いぜ。何たって捕まえた分だけ報酬が増えんるだ

から人手が多いに越した事はないだろ」
　ガジルの了承を得てリセラはジュビアを誘いに行く。そして翌日、ガジル、リセラ、ジュビアの三人は羽魚捕獲の為蜘蛛の巣谷へと赴いていた。勿論、リセラの方向音痴を知っている二人はリセラを先頭にさせずに。
「本当にここにいるのか？」
「えぇ、以前来た時に実際に釣ってたから」
　リセラはあの時の事を思い出す。あの時は一匹しか釣れず目の前でハッピーに食べさせたら不味いという結果になった事を苦い経験となっている。
「はぁ、取り合えず崖の下を見ているかを確認して」
　リセラは崖の下を見ながら絶句する。いきなり目的の羽魚を見つけてしまったのだそれも大量に。
「わぁ～すごい数ですね・・・」
「本当だな」
「・・・取り合えず釣りましょうか？」
　三人は釣竿を手に釣りを開始した。数分後、羽魚は一行に釣れずガジルがかなりイライラしている。
「ガジル落ち着きなさい・・・」
「これが落ち着けらるのか？まったく釣れねぇぞ」
「石の上にも三年とも言うでしょ？とにかく待ってればその内に釣れる」
　ガジルは冷静に言うリセラにそっぽを向いて釣りを再開する。だが、リセラも正直焦っており釣れなければくたびれ儲けの大損なのだ。意地でも釣り上げてやろうと考えているの。ジュビアの竿が動く。
「わわわ！リセラさん竿が!!」
「落ち着きなさいりちょっと貸して」
　リセラはジュビアの竿を受け取るとタイミングを見計らって竿を引く。竿の釣糸の針の部分に羽魚が喰らっていた。
「でかしたジュビア！」

「ええ、大手柄よ」
「そ、そんなに褒める事をしたのですか？」
ジュビアは羽魚がどれだけ取るのか難しいのか全然分かってはいなかったが取り合えず一匹は釣れた。三人は釣りを再開するがまた途絶えてしまい結局、一匹となり。報酬の山分けで少し揉める事になる。

ナツとの勝負

羽魚の報酬は最初に竿に食い付いたジュビアが多く取る形で決め１００万の内、３０万を受け取った。だが、女子寮は家賃は１０万である流石に３０万だけでは食い繋ぐ事はできないとリセラは考える。

「仕事を探さなきゃ・・・」

リセラは椅子から立ち上がってボードへ行き仕事を探す。張られている依頼はどれも報酬が良くリセラはどれにしようかと迷っていると。

「リセラ！俺と勝負しろ！」

「ナツさん・・・何でまた勝負なんですか・・・・・・」

リセラは妖精の尻尾に来てから少しずつ馴染んでいたが一つの気掛かりがあった。それはナツが毎回、勝負を仕掛けてくる様になった。それはリセラがバトル・オブ・フェアリーテイルで見せた瞬殺劇をギルドで見て勝負がしたくなったとナツが言い出したのだ。

「前にも言いましたよね。私は必要以上の戦闘はしたくないんです」

「良いじゃねぇか別に少しぐらい」

「駄目です。それに私は仕事に行きたいんです」

「やろうぜ!!」

ナツが駄々をこね始めリセラは大きな溜め息をつく。

「分かった・・・勝負すれば良いんでしょ？勝負すれば」

「いよっしゃー!!」

リセラは仕方なくナツと勝負する事になり二人は外に出る。二人はお互いに向かい合いナツは構えをとる。

「いくぞ！」

ナツは炎を纏った拳でリセラに向かってくる。

「火竜の鉄拳!!」

「ガジルと同じ滅竜魔法ね・・・でも、あまい」

リセラは少し体勢をずらすとナツの攻撃を避ける事ができた。ナツは地面を滑りながらも高くジャンプしてリセラに攻撃する。

「火竜の鉤爪!!」

炎の纏った蹴りをリセラに向けたがまた避けられる。リセラはナツの攻撃をまるで読めているかの様に避け続ける。
「こらぁ！にげんな!!」
「いやいや、勝負で攻撃を受けてたら駄目でしょ・・・」
「問答無用!!火竜の・・・」
ナツは大きく息を吸い込み始める。リセラは無表情でナツの行動を見ているだけで何もしない。
「咆哮!!!」
ナツが勢いよく息を出すと炎が吐き出された。炎が向かってきても動じずリセラは高くジャンプする。
「技は良い、戦闘における身体能力も。流石ガジルを倒した事はあるけど・・・でも・・・・・・」
リセラは換装をするとリボルバーの魔銃を出しナツに向けた。
「私の敵では無いわね・・・」
リセラは引き金に指をかけて力を入れる。
「ショックブラスター」
「ぐわぁ！・・・あれ？」
魔銃の引き金を引いて黄色い魔法弾がナツに当たる。だが、ナツは何ともなくピンピンしている。
「勝負あったわね」
「おい！まだ勝負は・・・あり？」
勝負は終わったと言い立ち去ろうとするリセラに再び飛び掛かろうとしたナツだが突然、体が痺れ始めて動けなくなっていく。そして、最終的には立てなくなった。
「ショックブラスターは相手を麻痺させる攻撃よ。まともに受けたから早くても三日には解けるから」
「ま、まて・・・」
リセラは痺れて動けないナツをほって置いて仕事を探しに行くのだった。

特別編バレンタインデー

女子寮のリセラの部屋。リセラの部屋は飾り気が無くかなり素朴な感じを醸し出して静かだが今回は騒がしかった。
「バレンタインデー？」
リセラが顎に手を置きながらジュビアに応える。
「はい！チョコ等のお菓子を想い人にあげる日です」
ジュビアは興奮しきった表情でリセラに言う。リセラは正直バレンタインデーに興味など無くそれ以前に想い人すらいないのだ。ジュビアはそれを知ってか知らずかリセラに話続ける。
「と、言う事でリセラさん。ジュビアとチョコを作りましょう！」
「いや、何で・・・」
「バレンタインデーは別に想い人以外にチョコをあげても大丈夫ですよ。どうせならギルドのメンバーの人達にもと思いまして」
ジュビアの言葉にリセラは確かにと思う。日頃から世話になり始めておりそのお礼をしていなかったとリセラは考える。
「・・・わかった」
「ありがとうございますリセラさん！」
二人はさっそく材料を揃えてチョコ作りを始める。だが、ジュビアはチョコ作りは初心者なのか作り方が書いてある雑誌を読み始めた。
「ジュビア。本当にちゃんとできるよね・・・？」
「大丈夫ですよ。たぶん・・・」
「たぶん・・・」
リセラはかなり不安になり始めた。ジュビアが余計な事をして失敗作になったらと。だが同時にジュビアは地味に料理が上手いので恐らくは大丈夫だという安心感がぶつかる。
「まずはチョコをドロドロに溶かす所からですね」
「わかった・・・換装」
ジュビアの言葉にリセラは赤い魔銃を取り出してボールの中にあるチョコに向ける。

「ちょっとリセラさん！何をしているんですか!!」
「いや溶かせ、て言うから軽めにファイアーバレットで溶かそうかと」
「コンロがありますよねそれでやって下さい。あ、後ボールから取り出して鍋でやってくださいね」
「う、うん・・・」
　リセラは鍋にチョコを入れて火を着けて溶かす。数十分掛けてある程度に溶かすと今度はかき混ぜる。チョコの形は無くなってドロドロなチョコになる。リセラはかき混ぜるの止めるとジュビアに回す。
「リセラさん。あなたはどの形のチョコを作りますか？」
「形？そうね・・・」
　リセラはチョコの形を考える。ハート形は論外、四角形はまぁまぁ、とリセラは悩んでいるとジュビアはいつの間にかデカイハート形の入れ物にチョコを流している。
「思ったんだけどジュビアさんは誰にあげるの？本命チョコを」
「はい。それは愛しのグレイ様です」
「あの露出狂の・・・？」
　ジュビアがあの露出狂ことグレイに惚れるとは思ってもみなかった。リセラが妖精の尻尾に入ってから分かった事だがグレイに脱ぎ癖がありリセラは少し軽蔑している。そのグレイに惚れたジュビアを内心、リセラはかなり心配する。
「ま、まぁ人の好みだしね・・・」
「はい！」
　リセラは戸惑いながらも入れ物を選んだ小さな丸い形のシンプルな物でチョコを入れる。そしてチョコを冷やし始めリセラとジュビアは椅子に座ってジュビアが持ち込んだアールグレイを堪能していた。
「そういえばリセラさんは意中の人はいますか？」
「いや、いないげど・・・」
「そうなんですか？」
「恋愛なんて物に興味はないの。したとしても私みたいな女に惚れる

人はいないでしょ」
　リセラはそう言うとアールグレイを飲む。
「そんな事はありません!ジュビアは知ってるんです。リセラさんは怖い所もあるけど本当は優しくて面倒見のある人でジュビアでも嫉妬してしまう位の美人という事を!」
「ジュビアさん・・・」
　リセラはジュビアはやはり友人として大切な存在だと改めて認識した。数分後、冷したチョコを形から取り出す作業に入る。綺麗に形ができたチョコはとても美味しそうに見える。
「これで出来たわね。さぁ、溶けてしまう前に包みましょ」
　ジュビアはハートのチョコを包み。リセラは小さな丸いチョコを袋に小分けして入れてリボンで結ぶ。ようやくできたチョコを持ってギルドへと足を運ぶ。
「(意中の人、か・・・)」
　リセラはジュビアに言われた意中について考える。リセラは力を求め続けてそんな事を考えている暇は無かった。だが妖精の尻尾に来てから暇ができ仲間と出会いで少し変わった。人らしい感情がリセラに芽生え始めているのだった。

連合軍、集結　～前編～

リセラは仕事の為にギルドにやって来ると何か空中に図が書いてありそれを見ているメンバー達がいた。リセラはミラの元に行き事情を訪ねる。

「何をしているのですか？」

「あ、リセラ。これは闇ギルドの組織図よ」

「組織図？何で闇ギルドの組織図なんか・・・」

リーラは疑問に思いながら首を傾げる。ミラは話を続ける。

「最近、動きが活発になってきてるのよ。ギルド同士の連携を強固にしないといけないのよ」

「このでかく書かれている円は？」

「ジュビアは知ってます。闇ギルドのバラム同盟。バラム同盟は六魔将軍、冥福の門、悪魔の心臓の三つのギルドからなる闇の最大勢力。それぞれが幾つかの直属ギルドを持ち闇の世界を動かしている・・・それとは別に独立しているのは大鴉の尻尾」

ジュビアが説明するとルーシィが何かに気づいたのか声を挙げる。

「あれぇ！鉄の森て・・・」

「あぁ、そうだ。あのエリゴールがいたギルドだ」

エリゴールの話はリセラも聞いていたが今はそんな事はどうでも良かった。組織図を見る限りバラム同盟はかなりの戦力を持った組織である事は分かるが問題なのは何故、今なのか。六魔将軍が六人しかいないから大丈夫だって言い始める者達をミラが咎める。

「その六魔将軍だじゃな」

後ろからマカロフが現れて注目が集まる。

「わしらが、討つ事になった・・・」

周りは驚愕の声を挙げるが一人例外がいた。

「お帰りなさいマスター」

「「「「ズゴッ！」」」」

ミラの天然発言に流石のリセラもずっこける。

「定例会如何でしたか？」
　ミラの天然発言は続きルーシィがツッコミを入れた。エルザがマカロフに訪ねるとマカロフは六魔将軍に動きがあり無視はできないと言う事で何処かのギルドが六魔将軍を倒す事になったそうだ。マカロフはこのまま戦っても強大なバラム同盟に妖精の尻尾が狙われると言い対抗する為に連合を組む事にしたらしい。
　妖精の尻尾、青い天馬、蛇姫の鱗、化猫の宿の四つ。各々のメンバーで戦うらしい。リセラは六魔将軍の事に関して考える。
「（六魔将軍。たった六人の闇ギルドにここまでの戦力が必要なのかしら・・・）」
　後日、リセラはエルザ、ナツ、グレイ、ルーシィ、ハッピーの面々で連合の集合場所に向かっていた。マカロフの人選でリセラも選ばれて今にあたるのだ
「まさか私まで行く事になるなんて・・・」
　リセラは今回ばかりは運が悪かったと思った。たった六人とは言え強大な六魔将軍を相手どって戦う事になったのだ。リセラは深い溜め息をつきながら馬車に揺られる。

連合軍、集結　～中編～

連合の待ち合わせ場所に到着する。かなり趣味の悪い場所だとリセラは考えていた。ルーシィやグレイも同じ考えの様で口々に言っている。

「青い天馬の、マスターボブの別荘だからな」

「彼奴か・・・」

「まぁ、そう言うな・・・あれでもうちのマスターが手を焼いた程の実力者だからな」

グレイ達はボブと面識があるのか苦手と言う単語が飛び交う。リセラは流石に面識が無いのでよく分からないと言う表情で首を傾げていると正面の階段からチャラケタ声が聞こえた。

「はい、到着！」

「「到着！」」

そのチャラケタ声はまるでホストの様な発生で妖精の尻尾が到着したと言う。リセラは無表情で見ているが頭は理解不能と言う単語で覆われた。

「「お待ちしておりました！」」

リセラは今、起きている状況をまだ飲み込めていなかった。チャラい言葉と登場で既にリセラの脳内は考えるのを止めてしまっている。

「我ら・・・」

「青い天馬より・・・」

「選出されし・・・」

「「トライメンズ」」

トライメンズと名乗った三人の声を聞いてリセラはやっと正気に戻った。リセラは人生で初めて困惑する出来事を体験して固まったのを反省する。

「白夜のヒビキ」

「聖夜のイヴ」

「空夜のレン」

三人は決まったと言うような表情でポーズを取る。

「青い天馬のトライメンズ！か、カッコイイ・・・それにあの週刊ソーサラーで彼氏にしたい魔導師ランキングでいっつも上位にいる！」
　ルーシィがそう叫ぶとトライメンズは次々とエルザをホストの接待みたいにもてなし始めた。ルーシィが呆気に取られていると今度はルーシィがレンに口説かれ始めた。
「はぁ、何してるのよ・・・」
　リセラが顔に手を当てて呆れていると今度はヒビキがリセラの元に来る。
「美しい亡霊さん。どうぞ此方へ・・・」
「いえ、結構です」
　リセラは冷たくあしらおうとしたがヒビキはしつこかった。
「いやいや、美しいあなたに冷たくあしらわれるのも悪くないです。さぁ、遠慮せずにどうぞ」
「だから私は・・・」
　リセラはヒビキに引っ張られてあの大きいハートの乗ったソファに座らさせる。隣にはエルザとルーシィがいた。リセラを座らせたヒビキは三人に向かってまたチャラケタ言葉を口にする。
「さぁ、長旅でお疲れでしょう。今夜は僕達と」
　ヒビキが言い掛けると他の二人がポーズして集まる。
「「レッツフォーエバー」」
　エルザとルーシィは流石にどう反応すれば良いのか分からないのか微妙な表情をしている。リセラは無表情で冷たく三人を見ていると階段からまた声が聞こえる。
「君達。その辺にしておきなさい・・・」
「な、何この甘い声・・・」
「一夜様」
「い、一夜・・・」
　リセラはエルザの挙動にすぐに気づいた。一夜と言う名前を聞いて明らかに動揺しているのは確かだった。嫌な予感がするリセラはすぐに遠くに離れる。そして、階段から降りてきたのは甘い声とは裏腹にかなり不細工な顔をした身長の低い男だった。

「久しぶりだねエルザさん・・・」
「ま、まさか・・・お前も参加しているとは・・・・・・」
「会いたかったよマイ・ファニー。あなたの為の一夜でーす」
　リセラは一夜の背後にキラメキッと言う言葉が見えた気がするがこの際、関係なかった。一夜の言動に背中に何か冷たい物走った感じがする位に苦手と初対面でそう認識した。それよりもエルザが一夜のマイ・ファニーなのか気になった。
「あ、あぁ・・・あ・・・」
「エルザが・・・！」
「震えてる！」
「それくらいキモい、て事ね・・・」
　あのエルザがここまで震え上がるのは分からなくもなくリセラも近づいて来たら殴ってしまいそうになる程のキモかった。
「まさかの」
「「まさかの！」」
「再会」
「「再会！」」
　一夜の言葉を合わせて点呼するトライメンズ。一夜はそのまま回転して階段の台に着地する。
「わっしょい」
「わっしょい！」
「わっしょい」
「わっしょい！」
「わっしょい」
「わっしょい！」
　一夜のわっしょいに合わせてトライメンズが一人ずつわっしょいを言ってそれが終わり拍手すると今度はエルザに向かって頭を下げる。
「一夜さんの彼女さんでしたか。これは大変失礼を・・・」
「全力で否定する！」
「ひぃッ！」

エルザが全力で一夜の彼女ではないと否定してその気迫にルーシィはビビる。一夜はトライメンズに向かって先程まで出していた道具を片付ける様に言うとトライメンズはかなりの早さで片付けた。
「さっき一夜様て言ってなかった？」
「結婚してなかったんだね」
ルーシィとハッピーは今、触れている場合ではない処に触れる。
「君達の事は聞いてるよ。エルザさん、ルーシィさん、リセラさん、その他」
「「ガーン」」
リセラを含めた女性陣は知っているのにグレイとナツはその他扱いをされた。一夜は徐にルーシィの香りを嗅ぐとパルファムとか言う始末でリセラはいい加減切れそうになった。
「キモいんですけど・・・」
「同感・・・」
「すまん私も苦手なんだ・・・すごい魔導師ではあるのだが・・・・・」
妖精の尻尾の女性陣満員一致で一夜は苦手と言った。